滅亡に向かう世界

――依存症時代の未来像

前野隆司

前野隆司――プロフィール

１９６２年、山口県生まれ。民間企業キヤノンの技術者として実績を上げたのち、アカデミズムの世界に転身したという、異色のキャリアを持つ研究者。その活動は多様で、触覚についてユニークな研究を行ない、また工学の知見から人間の脳モデル「受動意識仮説」を発表。現在は文理融合領域、慶應大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授としてヒューマンマシンインタフェース、ロボットから、心の哲学、倫理学、教育学、組織・地域活性化、幸福学まで、あらゆるシステムのデザインとマネジメントに興味を持つ。

『脳はなぜ「心」を作ったのか―「私」の謎を解く受動意識

仮説』（筑摩書房、２００４）、『錯覚する脳─「おいしい」も「痛い」も幻想だった』（筑摩書房、２００７）、『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか？─ロボティクス研究者が見た脳と心の思想史』（技術評論社、２００７）、『記憶─脳は「忘れる」ほど幸福になれる！』（ビジネス社、２００９）、『思考の整理術─問題解決のための忘却メソッド』（朝日新聞出版、２００９）、『思考脳力のつくり方─仕事と人生を革新する四つの思考法』（角川ワンテーマ21、２０１０）など、活発に著作も発表している。

前野隆司 http://takashimaeno.com/

青山　インタビュアーを務めさせて頂きます青山由佳です。宜しくお願いいたします。

今日は、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授の前野隆司さんに、「滅亡に向かう世界」という刺激的なタイトルでお話をお伺いしたいと思います。

さっそくですが、前野さん、「滅亡に向かう世界」とはどういう意味なのですか？

前野　まさに読んで字のごとく、人類は滅亡に向かうフェーズに入ったということです。すべての生物は、拡大していくフェーズと、滅亡に向かうフェーズをたどり、最後には滅亡して次の生物に世界を譲ります。人間も――いや、現代人は、というべきかも知れませんが――そろそろ滅亡のフェーズに入りつつあ

るので、フェーズにあった生き方をしようよ、ということを言いたいのです。

青山　滅亡に向かう、とは、暗い未来予想ですね。

前野　いえ、決して暗いとは思っていません。「滅亡」は暗いものだ、というネガティブな視点こそ、見直すべきなんじゃないでしょうか。西洋近代的な進歩史観では、世の中はどんどん発展していく。過去は悪くて、未来はいい。これに対して、東洋型の歴史認識というのは、おおざっぱにいって、循環型です。歴史は繰り返す。進歩なんかない。

キリスト教やユダヤ教、イスラム教では、死後に天国に行きますよね。そういう理想がある。これに対して仏教やヒンドゥー

教では、輪廻する。歴史は発展するのではなく、繰り返すのだという基本がある。

だから、つまり、滅亡は悪、理想的な世界は善、という進歩史観を見直さなければならないと思うのです。

青山 わからなくなってきました。世界はいつか滅亡に向かうと考えるのはむしろ西洋的世界観では？ キリスト教では、世界の終わりに神が人々を裁く「最後の審判」がやってくると考えます。

前野 はい。まず神が世界を作り、人間が何千年か世界を営み、そして、最後の審判があって、最後に天国と地獄がある、というような一方向的な時間の流れを進歩史観と呼びました。その

ような、誰かが人為的に世界を作ったという意味での滅亡ではなく、自然現象として、生物の必然として、滅亡に向かうと考えるのです。そしてそれは終末ではない。人類のあとには別の生物が続くわけですから。それは知的生命体かもしれませんし、ゴキブリかもしれません。

青山 宗教的な意味ではなく、生物学的な議論だ、ということですね。でも、先ほど、東洋流の思想として輪廻を持ち出されました。輪廻は宗教ですよね。それから、仏教では、輪廻は悟りを開かない生物が繰り返すのであって、悟ったあとは天国のようなところ——極楽浄土——へ行くのではありませんでしたっけ？　だとすると、進歩史観的ですね。

宗教は「比喩」の世界か⁉

前野　鋭いご指摘ですね。私は輪廻が正しいと言いたかったのではなく、万物は流転する、という東洋思想のわかりやすい一例として、比喩的に輪廻をあげました。

私は、宗教というのは、それぞれの時代にあわせた表現としての「比喩」が発展したものに過ぎないんじゃないかと思っています。輪廻というのもたとえ話なんじゃないかと思うんです。たとえば、「物質的には生物は死後土に還り、それがやがて他の生物の材料となる」という物質循環や、「自分が仮に他の生物に生まれ変わるとしたら、必要以上の殺生なんかする気がしないでしょ」という倫理学を昔の人にわかりやすく伝えるためもの。他の宗教も同じです。比喩だと思えば理解できます。

旧約聖書のモーゼの出エジプトで、海が割れますが、割れるわけがない。海が割れるほど大変なユダヤ民族の大移動だった、という比喩です。

キリストはいろいろな人の病気を治します。口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになる。医療行為をせずにそんなことができるはずはない。そのように比喩したいほど、癒したということでしょう。

えーと。話がそれましたが、悟ったあとは天国に行くという話でしたね。日本に伝わってきた大乗仏教でよくいわれる、念仏を唱えるだけで救われる、というのも私はある種の比喩だと思います。もともとブッダは、あらゆる欲望から超越した「空」の境地がわかることを悟りと呼び、修行の果てにそこに至るこ

とを目指しました。これは死後の世界の話ではなく、今このときが変わるのです。究極の「気の持ちよう」です。

しかし、出家したお坊さん以外の人がそんな究極の「気の持ちよう」に至るのは簡単ではない。そこで編み出されたのが、南無阿弥陀仏と唱えるだけで救われる、という考え方です。前者がタイなどの上座部仏教、後者が日本などの大乗仏教として今も残っていますが、両者は違う考え方なのではなく、やはり、後者は比喩的な考え方だと思うのです。一心に念仏を唱えているときは無心に近い。ほかのことを考えていない。つまり、実は、悟りに近づいているんです。これが念仏の目指すところなんじゃないか。ただ、普通の人は、その状態の先に悟りという「気の持ちよう」があるといってもわかりにくいので、死後に善人だけが三途の川を渡れる、という比喩で説明した。そう考えれ

ば納得がいきます。本当は死後の世界の話ではないのです。

実は、ブッダは、死後の世界のことはわからないからと、死後の世界については語っていません。輪廻の話や三途の川の話は、古代インド思想の考え方が、ブッダの死後に仏教に採り入れられたものであり、ブッダ自身が言っていたことではありません。

なんだか、宗教の話になってしまいました。生物学的滅亡の話に戻しましょうよ。

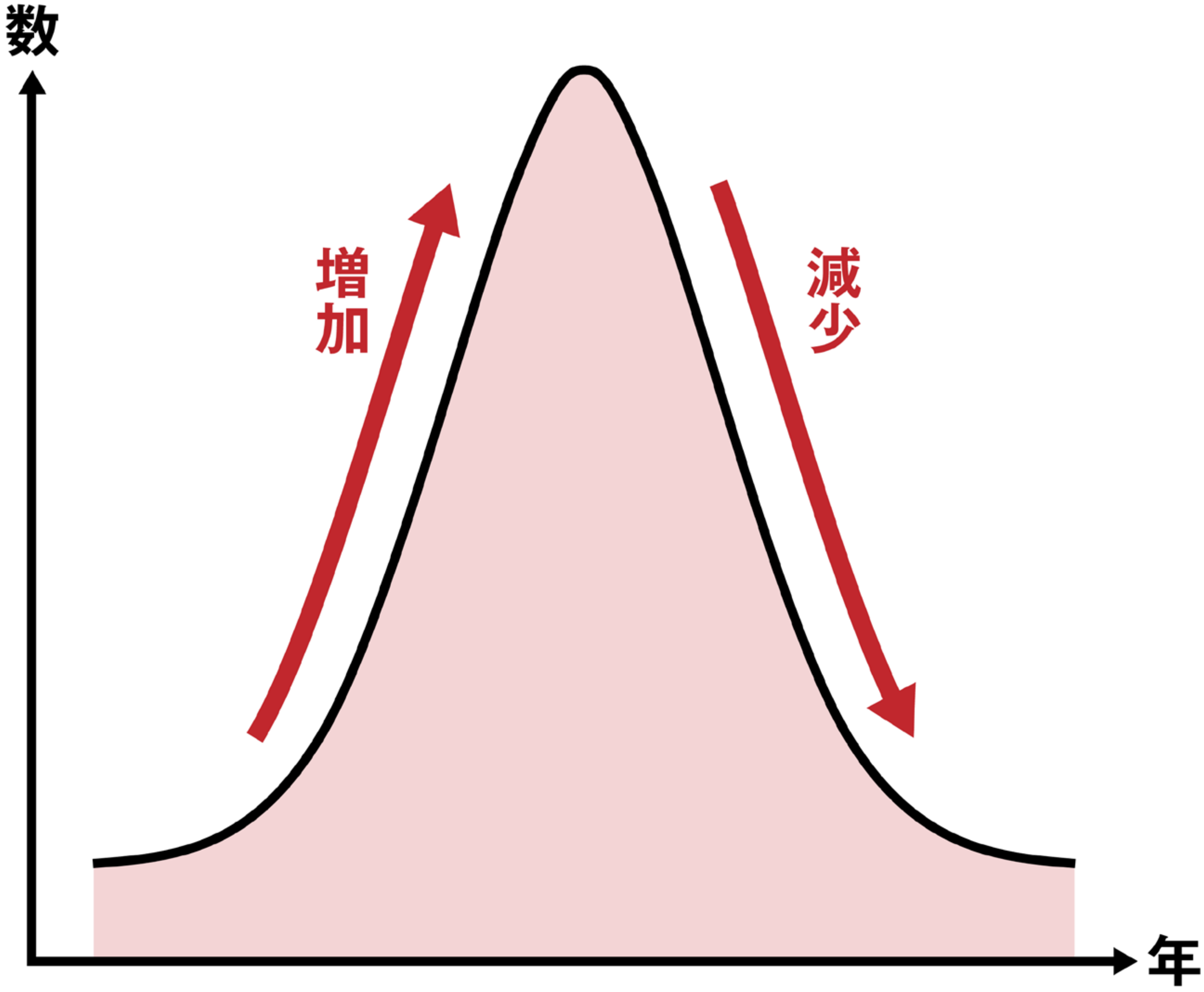
青山　そうですね。なぜ、人類は、生物学的に滅亡に向かっているのと考えるのですか？

生命の異常発生と激減

前野　ネズミや昆虫の異常発生ってご存知ですか？　他の生物でもいいんですが、何らかの原因で、異常な量に増える。普通は気候などの影響で餌が増えたことが原因ですね。しかし、増えすぎて、餌が足りなくなり、一気に減少する。ネズミが大量に増えすぎたと思ったら、皆が次から次へと海へ飛び込んで自殺してしまうという現象が有名です。滅亡するわけではないですけどね。激減する。

【図①】を見てください。エクスポーネンシャル（幾何級数的、急激）な増加（直線ではなく、下に凸の曲線を描いた増加）が、あるときに終わりを告げ、エクスポーネンシャルな減少（下に凸の曲線を描いた減少）に転じる。これが異常発生の基本的な特徴です。図のように左右対称とは限りませんけどね。ネズミの集団自殺

の場合、後半のカーブは急峻になります。
そして、人類もそろそろ減少のフェーズに入ろうとしている、
ということなんです。



［図①］生命の急増と急減

青山　ちょっと待ってください。確かに、日本の人口は減り始めましたけど、世界人口は増え続けていますよね。

前野　そのとおりです。しかし、世界人口の増大ペースは鈍ってきており、二〇五〇年くらいには減少に転じるのではないかという予測があります。だとすると、これまでの長い人類史と比べたら、もうすぐですよね。

つまり、日本は、世界に先駆けて、滅亡の道のりを歩み始めた先駆者というわけなんです。世界人類のお手本です。

青山　おっしゃりたいことはわかりましたが、そう言われてもあまりうれしくありませんね。先ほども滅亡をポジティブにとらえるべきだとおっしゃいましたが、滅亡とは、死に絶えること

とです。死は、どう考えてもいいことではないんじゃないですか？

「人類の滅亡」と「人間の死」のアナロジー

前野　「死」とおっしゃいましたね。いい視点です。

人類の滅亡は、一人の人間の死にたとえることができます。

【図①】を一人の人間の一生ととらえ、縦軸は数となっていますが、これを、一人の人間が成し遂げたアウトプットの数と読み替えてみてください。すると、子どものころはアウトプットは少ないですが、やがて大人になり、仕事についたり家庭を持ったりすると、増えていきます。

アウトプットというのはわかりにくいですかね？　仕事の成

果でもいいですし、友達とのイベントでもいいですし、何でもいいんです。何か、やったこと。充実感の総和でもいい。
人生は「生老病死」だといいます。人生のある地点を過ぎると、病気になったり、体力が衰えたりして、活動量は減っていきます。身体能力という意味では二十歳がピークですし、仕事という意味では定年を迎えるころがピークかも知れません。したがって、何を縦軸にとるかによって、ピークの位置は異なりますね。いずれにせよ、アウトプットはあるとき減少に転じ、最後に死とともにゼロになる。
もちろん、すべての人のアウトプットがこんなにきれいな山ひとつのカーブになるわけではありません。ふたこぶの人も、ギザギザの人もいるでしょう。それは人類の人口のカーブを見ても同じことです。**【図①】**は、かなり単純化したイメージ図

です。

で、ご質問は、「死はどう考えてもいいことではないのではないか？」でしたね。そうですか。死は、いいこととは考えられませんか？

青山　うーん。今の私には、いいこととは考えられません。たくさん生きて、いろいろな楽しい経験をしたいです。

前野　青山さんはまだお若いから、まだまだ長く生きたいとお思いでしょう。でも、五百歳くらいまで生きて、体がぼろぼろのおばあちゃんになってもまだ生き続けたいですか。

青山　年を取って、寝たきりになったりボケたりして人に迷惑

をかけるようになるくらいなら死にたいと思うかもしれません。でも、そうなったとしても、死んで何もなくなってしまうよりも、なんとか生きていたいと思うような気もします。前野さんは、そうではないのですか？

前野　私も生きていろいろな経験をしたいです。だからできれば長生きしたい。でも、死は誰にも必ず訪れます。誰にも来ることを、よいことか悪いことかと論じること自体がおかしくないですか？　つまり、死というものは、よい・悪いという価値判断とは独立です。死は、よいものでも、悪いものでもない。誰にでもいつか来るものである。

ただ、死は突然やってきて、誰も死をじっくり味わうことはできない。何しろ、死の直前になっても「何秒後に死ぬか」は

わからないですし、死んだあとで思い出すこともできないですから、ほんの一瞬です。だから、私たちの「意識」の世界では、眠る瞬間が意識できないのと同様、死の瞬間はやってこないというべきなんじゃないかと思います。いずれにせよ、死はよいことでも悪いことでもない。それだけです。

「滅亡」はいいことでも悪いことでもない

青山　死も滅亡も、いいことでも悪いことでもないとおっしゃるんですね。だったら、お言葉を返すようですけど、前野さん自身がおっしゃった、「死はいいことではないか」「滅亡は悪ではない」――というご発言と矛盾するのではないですか？

前野　よくご注意ください。私は、「滅亡は悪、という進歩史観を見直さなければならない」とは言いましたが、「滅亡は善、という価値観に転換しなければならない」とは言っていません。言いたいことは、善悪のどちらかはっきりさせたいのではなく、「滅亡は善か悪か」という価値判断自体を超越しなければならない、ということなんです。

青山　それは誤解しやすいですね。「Aである」を見直すべきである、というのは、「Aではない」といいたいのではなく、「Aか非Aかという判断をすべきでない」ということなんですね。

前野　そうです。「Aか非Aか」という問いを俯瞰して、といいますか、もう一つ上のレイヤー（階層）から見よう、という

ことなんです。

青山　まだよくわからないので教えてください。「滅亡はいいことでも悪いことでもない。にもかかわらず、滅亡を容認すべきだ」とおっしゃるんですよね。「いいこと」だから容認するのではなく。

前野　そうです。そこが大事なところなんです。

日本を例にとりますと、これまでは、右肩上がりの成長を目指すことがよしとされた。これに対し、現在は、意見が二分されています。一つは、これまで通り、ＧＤＰの増加を目指すべきだ。成長こそが日本のためだ、という考え方。もう一方は、これからは人口減少社会なのだから、日本のＧＤＰが減ること

は受け入れて、少ない人口なりのいい国にしていきましょう、というスタンスです。これからは後者が重要になる。

青山　でも、人口減少社会にソフトランディングしましょう、というのと、滅亡を受け入れましょう、というのは違うと思うんですけど。滅亡は、あまりに極端ではないですか？

前野　覚悟の問題ですかね。実際は、滅亡まで何千年もかかるかもしれないし、ある数のところで減少は止まるかもしれない。むしろ、そう考える方が一般的でしょう。しかし、時代の大きな流れとしては、つまり、人口減少社会の遠い延長線上には、滅亡がある。このことをわかったうえで人口減少社会を生きましょう、ということです。

青山 そうすることのメリットは何でしょうか？ つまり、そんな極端なことを考えていなくても、人口減少社会を豊かに生き抜くことはできるのではないでしょうか。

前野 またまたいい質問ですね。

ご質問にお答えする前に、言い忘れていたことを述べさせてください。人口が減少に転ずることの理由です。逆に質問しますが、世界の人口はなぜ減少に転ずるのでしょう。

世界人口はなぜ減少するのか？

青山 日本の場合は、子どもを育てるコストが高くなり、多く

の人が多くの子供を産もうとしなくなったこと。一人でいい、あるいは産まなくてもいいという人が増えたことでしょうか。また、その背景には、結婚して子供を産むのがふつう、という価値観にとらわれない人が増えたことがあると思います。国の子育て支援のような施策が不十分なのも原因でしょう。それから、不況が続く、産業が他の国に抜かれる、高齢化が進む、といったようないろいろな要因から閉塞感があって、未来に生まれてくる子が幸せとは思えないから産むのをやめておこうか、というような気分も蔓延しているように思います。

外国の場合は……難しいですね。ヨーロッパはおおむね日本と同じような理由だと思います。ただ、フランスあたりでは子育て支援が功を奏して、子供が増えているといいますよね。中国は、一人っ子政策の影響でしょう。インドでは、やはり、人

が増えすぎるからでしょうか。

前野　おっしゃることは皆正しいですが、もう少し、マクロな原因を考えてみましょう。根本原因といいましょうか。そのために、アナロジーで考えてみましょう。異常発生した動物は、どうして急激に減るのでしょうか？

青山　前野さんがおっしゃったとおり、食糧が足りなくなって飢え死にするからではないですか？

前野　そうですね。生物が異常発生すると、食糧が足りなくなる。このため減少するわけです。ただし、必ずしも飢え死にするわけではなく、前にネズミが集団で海に飛び込む現象をお話

ししたように、自ら減少するような行動をとることもあります。
人間と他の生物とを比べてみると、現代とは「人間が異常発生した時代に過ぎない」という気がしませんか？

青山　「人間の異常発生」ですか。刺激的ですね。というか、あまり聞きたくない言葉ですね。こわい響きがあります。

人間が「異常発生」した時代

前野　そうでしょう。人間は、「人間の異常発生」なんて言葉は聞きたくない。あとで、「現代人は現代的生活への依存症だ」という話もしたいと思いますが、これも聞きたくないかもしれません。

でも、人間は異常発生したと考えれば、他の動物の異常発生とよく似ていませんか。

つまり人間は、増えられるだけ増えてきたに過ぎないのではないか。狩猟・採取生活の時代は、あまり増えられなかった。狩猟や採取で維持できる人口は少ないですからね。しかし、農耕を始めて、人類は大きく増えた。農耕革命です。でも、現代と比べると、大したことはありません。次に、産業革命が起きて、豊富なエネルギーを手に入れた。農業は大規模化し、効率化した。また、世界的な食糧の交換が可能になった。その結果、地球上で食える人数が莫大になった。

食えるんなら増やそう、というわけです。子供が多いほど、労働力になりますしね。で、産めや増やせやになった。ところが、人間はおろかですね。勢いがつくと歯止めはききません。「車

は急に止まれない」と同じです。「人間は急に減らせない」。だから、増えすぎた。当然、増えすぎた人に食べさせる食糧は足りなくなる。エネルギーも、物資も、空間的ゆとりも足りなくなる。足りなければ、減るしかない。だから世界人口は減少に転ずるのです。

厄介なのは、これまでと違って、もはやフロンティアがないことです。昔は、人が増えすぎたら移動すればよかった。しかし、もう、地球に新大陸はない。それどころか、皆さんご存知のように、石油や金属資源は取り尽くされ、食糧も水も足りない時代が来るといわれています。これはまさに動物の場合と同じですよね。増えすぎて、必要なものをあさりつくした末に、減っていかざるをえない。これが地球規模で起きている。

しかも、大幅な減少圧力が加わる可能性があります。一つは、

新型の病気の蔓延。人が増えすぎ栄養が不足した場合、衛生状態にも問題が生じるでしょう。病気の温床です。そんなときに新型の病原菌が発生したら、驚くほど多くの人命が失われる可能性があります。これは、悲観的な空想ではない。過去にも、ヨーロッパでのペストなど、いろいろな例があります。ペストでは、ヨーロッパの人口の三分の一から三分の二くらいが失われたといわれています。これが世界規模で起こったら大変なことになります。

疫病が流行しなくても、食糧不足による飢餓は増大するでしょう。日本にいると実感しにくいですが、現在、すでに飢餓人口は十億人といわれています。これがさらに増えることは想像に難くない。もちろん、地球温暖化も、食糧不足、水不足、疫病蔓延を助長します。

さらに、戦争の危険もあります。単にたとえ話ですが、大国が核戦争したら、どうなるでしょう。あえてどことは言いませんが、今後は様々な政治体制の国が大国になっていく。GDPベースで見ると、二〇五〇年の国力ランキング（予想）は、中国、アメリカ、インド、ブラジル、メキシコ、ロシア、インドネシア、日本、イギリス、ドイツの順――**【表①】**です。しかも、中国が突出していて、アメリカとインドが二位争いをしている。パワーバランスが今とは全く異なる。一般論として、パワーバランスが変わるとき、様々な軋轢が生じます。政治体制の世界標準も変わる。現代世界の政治・経済は資本主義を基本とする法治国家体制が中心ですが、必ずしもそうではない体制の国家が頭角を現してくる。ここで世界秩序が動揺するのは必至です。しかも、食糧、水、資源をめぐる争いは激化せざるを得ない。

最悪の場合は核戦争になってもおかしくない。

つまり、人口の減少は、【図①】のような生易しいものではない可能性がある。何千年もかけて減少するのではなく、ネズミが集団で海に飛び込むのと同様、多くの人が集団で死んでいく可能性がある。

順位	国名	2050年GDP	2007年GDP	増加率
1位	中国	70.71兆ドル	3.25兆ドル	21.7倍
2位	アメリカ	38.51兆ドル	13.84兆ドル	2.7倍
3位	インド	37.66兆ドル	1.09兆ドル	34.5倍
4位	ブラジル	11.36兆ドル	1.31兆ドル	8.6倍
5位	メキシコ	9.34兆ドル	0.89兆ドル	10.5倍
6位	ロシア	8.58兆ドル	1.28兆ドル	6.7倍
7位	インドネシア	7.01兆ドル	0.43兆ドル	16.3倍
8位	日本	6.67兆ドル	4.38兆ドル	1.5倍
9位	イギリス	5.13兆ドル	2.77兆ドル	1.8倍
10位	ドイツ	5.02兆ドル	3.32兆ドル	1.5倍

［表①］2050年の世界GDPランキング予想
（米ゴールドマン・サックス社、2007年）

青山　なるほど。壮絶ですね。
少し前の、現在の人口減少社会と、滅亡という極論のギャップに違和感がある、という私のご質問に対し、その前に人が減少する理由を考えよう、とおっしゃった意味がわかりました。つまり、人口が減少に転じる原因を世界規模で考えてみると、緩やかな人口減少社会を予想しているのでは生易しすぎる。もっと急激な人口減少社会がやってくるかもしれない、という危機感を鼓舞されているわけですね。

前野　ある面では、その通りです。

なぜ人類は滅亡を自覚すべきなのか？

青山　では、先ほどお聞きしたことを少し変えてもう一度お聞きします。

人口減少社会の延長線上には、滅亡があるかもしれない。確かに、そうかもしれません。

でも、このことを自覚することが、なぜ現代人に必要なのでしょうか。目前に迫ってきたなら対処せざるを得ませんが、まだ差し迫った問題にはなっていない。環境問題と同じで、十年、二十年先のことに今から備えることは、意外と難しいというのが実際のところではないでしょうか。

前野　その通りです。まさにご質問の中に回答が含まれています。要するに人類はばかです。愚かなんです。だからこそ、危機が差し迫る前からじっくり考えなければならない。

どういうことかというと、人間は、完全に論理的・合理的に考えることはできない。どうしても、目先のことにとらわれる。脳がそうなっているんです。

例を挙げると、ノーベル経済学賞を受賞したカーネマン教授の様々な研究がそれを示しています。たとえば、ピーク・エンドの法則。あらゆる経験の快苦の記憶は、ほぼピーク時と終了時の快苦の度合いで決まるという法則です。途中がどうであろうとも、「終わりよければすべてよし」です。幸福最大化という観点から考えると、全体の平均がいいほうが数学的には合理的なはずなのに、「最高のところがよければすべてよし」または「最高のところがよければすべてよし」です。

もちろん、人間はカーネマンの理論を理解することはできる。つまり、直感的には合理的判断をできないが、冷静に時間をか

けて考えれば、自分の直感が合理的ではないということを理解することはできる。ここが他の動物との違いです。

いいですか。他の動物も、人間も、合理的ではない。しかし、人間は、自分が合理的ではないということを理解することはできる。

青山 なるほど。動物の行動は合理的ではないが、人間の行動は合理的である、と考えたくなりますが、そうではなく、人間も合理的ではない。ただ、人間は合理的でないことを知っている。

ソクラテスの「無知の知」に似ていますね。ソクラテスが他の哲学者との議論でいつも使った論法は、あなたはわかったつもりでいるけれども本当はここをわかっていない、という反証

の指摘でした。そして、自分は「知らないということを知っている」と言った。自分は知っているとは言わないのですから、自分は決して反証されない。無敵の論法でした。

前野　ソクラテスは、その論法がテクニックとしてうまかったということもできるでしょうが、やはり、そうではなく、知識や知恵というものも本質的には相対的である、あるいは究極的には無価値であるということを見抜いていた、という意味で賢人といわれたのだと思います。

さて、現代人は、ソクラテスにも増して、無知でばかで愚かです。なのに、知恵を積み重ねてどんどん進歩したと思い込んでいる。これを変えなければならないと思うのです。

青山　滅亡の時代を生き抜くために？

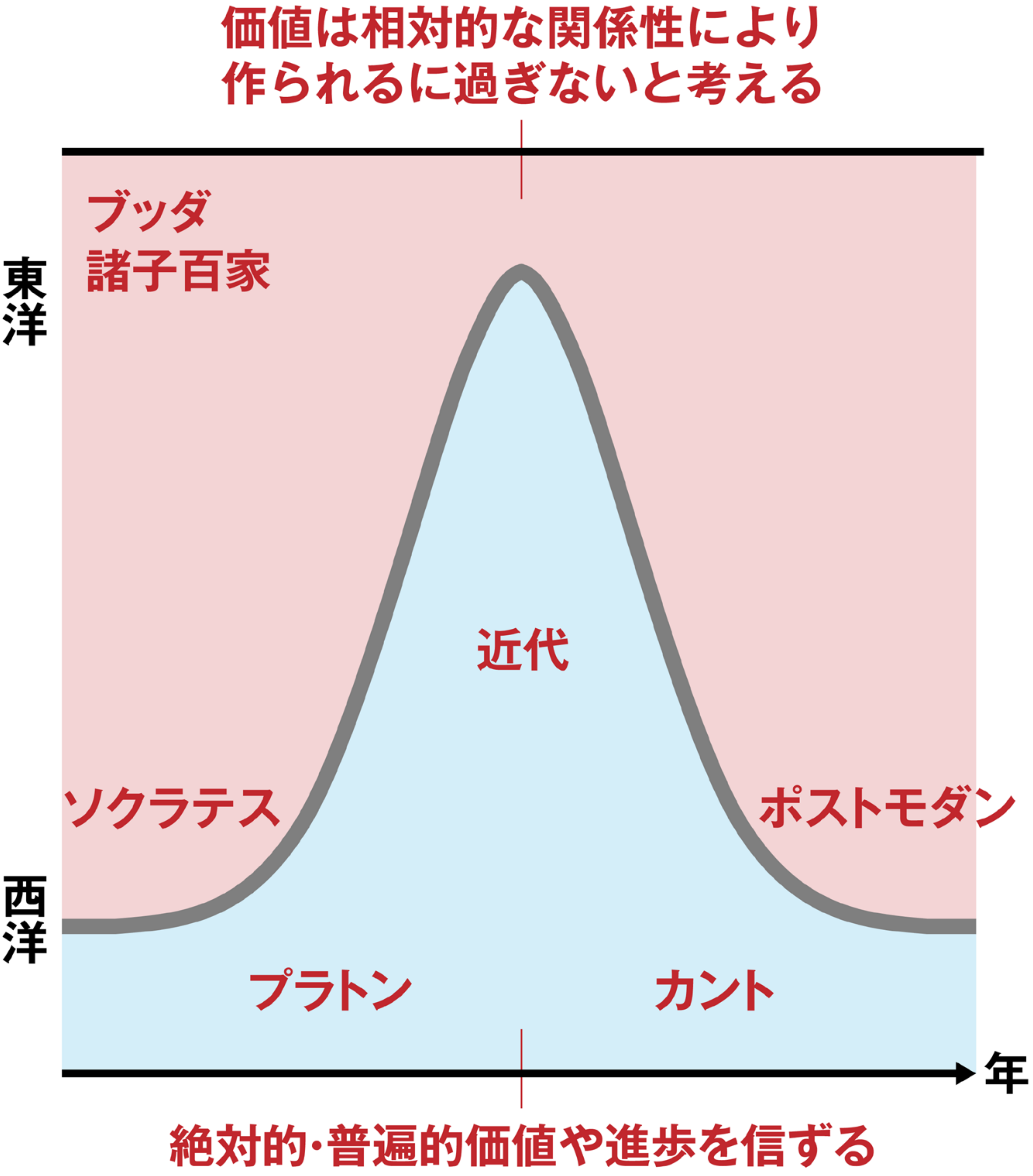
前野　そうです。

二つの時代――絶対的・普遍的理想を信じる時代と、信じない時代

前野　ちょうどいいところでソクラテスが出てきました。私は、ソクラテスが好きでね。私は、ソクラテスまでの時代と現代は似ていると思うんです。一方、ソクラテスの弟子のプラトン、その弟子のアリストテレスの時代から、近代といわれるデカルトからカントまでの時代が、似ている。要するに、時代は、ある二つの立場のどちらが優位かによって、大きく二つに分けら

れる。もちろん、おおざっぱに、ですよ。例外は必ずありますが、大きな流れとして、です。

【図②】を見てください。時代の変遷のイメージ図です。横軸は年。ピンクと水色のどちらが優位か、その変遷を表しています。つまり、昔はピンク優位、プラトンからカントまでの時代は水色優位、現在は再びピンク優位。



［図②］絶対的価値の時代と相対的価値の時代

プラトンからカントまでの時代は、紀元前五世紀から十九世紀までですから、本当に長い。人類史のほとんどといってもいい。といっても、西洋史の、ですけどね。いや、現代の日本人も含めて、世界の現代人の多くはこの考え方の影響を受けているから、プラトンから現代まで、といったほうがいいかもしれません。

まあ、とりあえず、プラトンからカントまで、にしておきましょう。

プラトンからカントまでとは、つまり、「プラトンのイデアからカントの格率まで」です。プラトンのイデアは物質界の背後にあると考えられた永遠不変の実体。カントの格率とは人の行動の規範となる絶対的な道徳法則。そのような、絶対的・普遍的な真・善・美があると信じられた時代です。もちろん、進

歩も信じられた。人類は進歩している。向上している。理想に向かっている。そう信じられた時代です。
そんな考え方の繁栄のカーブ（【図①】と【図②】の水色）は、似ています。
一方、ポストモダンの哲学者たちは、そのような絶対的・普遍的な理想というものは幻想であったといいます。近代を批判するからポスト近代（ポストモダン）。ポストモダン哲学者から見ると現代はポストモダンの時代なのですが、これがすこし厄介です。ポストモダンという名称はリオタールの著書「ポスト・モダンの条件」に由来するのですが、リオタールも含めて、「自分はポストモダンの哲学者だ」と言っている人は誰もいないのです。それから、哲学者が「絶対的・普遍的な理想は幻想だ」といっても、現代の一般市民がそれを受け入れているわけでは

ない。だから、私が、「ソクラテス以前と、ポストモダンの時代(つまり、現代)は似ている」といっても、よくわかってもらえない。いや、よくわかってくれる人はいるんですよ。むしろ、そんなの当り前だという人もいる。しかし、やっぱりわかってくれない人が多い。

青山 そして、その類似性こそが、滅亡の時代に重要だと。

前野 私の言いたいことが、よくわかりますね。

青山 だてに哲学オタクをやってるわけではないです。

前野 今どきの若い女性にしては珍しいですね。青山さんの思

想をもっと聞き出したいですね。ところで、今日の話は、哲学ではないつもりだったんですが。つまり、「哲学と、現実社会の営みと、科学技術をつなぐ試み」にしたかったんです。

青山　これからでも遅くありません。哲学的な背景をお話しいただき、そのあとで、その文脈から現代社会を切る、というのをお願いします。

「ソクラテス以前」と「近代の後（ポストモダン）」

前野　ありがとうございます。そうさせていただきます。で、要するに、ソクラテス以前の思想と、ポストモダンの思想は、滅亡と相性がいいんですよ。といっても、繰り返します

が、ポジティブな意味で、ですよ。ここが重要なところで、よく誤解される点です。

ソクラテス以前とは、ギリシャで言えば、ドイツ語でフォアゾ・ソクラティカと呼ばれる人たちのことです。フォアゾ・ソクラティカとは、そのまま、「ソクラテス以前」という意味です。しかし、私の言うソクラテス以前は、フォアゾ・ソクラティカも含みますが、東洋も含む。つまり、全世界において、ちょうどソクラテスが現れる以前という意味です。東洋で言えば、インドのブッダの仏教や、中国の老子、荘子のタオが含まれます。要するに、種明かしをすれば、すべては無や幻想であると考えたり、素朴に自然崇拝をしていたり、いわば原始的なというか素朴な思想とつながっていた時代です。

これに対し、プラトンのイデアとか、キリスト教の唯一絶対

神とか、人が作り出した理想を理論づけて正当化していく時代が、プラトンからカントまでの時代。悪い時代ではないですけどね。科学技術も進歩しました。物事を分解して理解しようとする要素還元主義によって、科学技術も、医学も、経済学も進歩した。産業も進歩した。「進歩」というのは、知見が増えて学問が体系化され、生産量が増えて人々の所得が増えた、という意味です。彼らにすると、ソクラテス以前の西洋のあり方と、西洋が近代になったのに東洋ではずっと続いていた古くからのあり方は、遅れているように見えた。何しろ、プラトンからカントまでの新しく近代的な考え方を取り入れていないのですから。

しかし、理想だと思った共産主義はだめだったし、進化論で得られ続ける知見はキリスト教と整合しないし、科学技術が環

境破壊や貧富の格差を生んでしまった。つまり、どこにも理想、普遍は見つからなくなってしまった。イデオロギーにも、宗教にも、科学技術にも。そこで、「あれ？　理想、普遍、絶対というものは、人為的に作り出したものに過ぎず、本当はないんじゃないかな？」あるいは「進歩という価値も、やはり人が作り出した幻想に過ぎないんじゃないかな？」と何千年ぶりかで見直すことになったのが、ポストモダンの時代、というわけです。理想に向かって走っていたら、梯子を外されたというか、目標地点が逃げ水のような幻だった。

さあたいへんだ。こんな正解のない時代に、どうやって生きていけばいいのか、となります。答えは、ソクラテス以前か、ポストモダンの教えに従え、ということです。

青山　よくわかります。ポストモダンとは、要するに、神は死んだ、普遍的なものは死んだ、哲学は死んだ、という考え方ですね。西洋が近代までに築きあげてきた価値は本質的な正解ではないのではないかと疑い、西洋の人間中心主義（ないしは人格神中心主義）を否定した。その究極はニヒリズム——虚無主義です。何事にも本質的な価値はない。

しかし、わからないのはそのあとです。ニヒリズムから、「ポジティブに滅亡を目指そう」という、あたかも新たな普遍主義のようなスローガンが出てくるのは、どのような論理展開によるのですか？

前野　ニヒリズムは、すべての価値を否定するものだから、そこからポジティブな価値が出てくるのはおかしいのではない

か、という疑問ですね。

仏教が、すべての欲を捨てることを目指すのに、その境地である悟りの状態が、「心の絶対の平和であり、エデンの園を行くがごとくに人世を楽しませること」（鈴木大拙）というような幸福の境地になりえるのか、という疑問。

あるいは、ニーチェはニヒリズムには受動的ニヒリズム（弱さのニヒリズム）と能動的ニヒリズム（強さのニヒリズム）があるといいます。後者は、あらゆることが無価値であることを前向きにとらえ、一瞬一瞬を一所懸命生きる態度だといいます。ニヒリズムがなぜこのように分岐するかということ。

そういう疑問ですね？

なぜ「無」から「価値」が導かれるのか？

青山　はい。そうです。なぜ、本質的な意味で、「無」から「価値」が出て来得るのか、という根源的な疑問です。

前野　それはある意味では、なぜ「無」からいきなりビッグバンが起こって宇宙ができたのか、という問いと同じく難しい問いだと思います。なぜ宇宙ができたのかは、どう考えてもわからない。ただ、なぜだかできてしまった。だから、宇宙は今ここに存在している。ということを合意しておきましょう、とりあえず。

ヒュームは、「である」から「べきである」は決して導けないといいます。存在から価値は導けない、真（哲学）から善（倫理学）は導けない、と。宇宙が今ここに存在している。この事

実から、宇宙はどうあるべきである、という価値は導けません。人間は今ここに存在している。この事実から、人間はどうあるべきである、という価値は導けません。

だから、おっしゃるとおり、西洋哲学的には、ニヒリズムから、「ポジティブに滅亡を目指すべきだ」という価値は導けません。ただ、気を付けていただきたいのは、哲学・倫理学が問題にしているのは、本質的・根源的な価値の話だということです。私たちが直面する日常的な価値の話ではない。言い換えれば、私たちは、朝起きたら何をすべきか、とか、今日はどの仕事をすべきか、といった日常的な小さな価値と向き合い、次々と処理をしていきます。つまり、根源的な大きな価値は存在しないのに、日常的には場当たり的に小さな価値に直面せざるを得ない。これが現実です。これは実は変な構造で、最終的に何を目指す

のかを知らないまま、個々の細かい目的を達成し続けなければならない、というのがポストモダンの時代に生きる我々の宿命なのです。

これはたとえて言えば、象が全体としてどんな形をしているか知らずに、象をすべて洗いなさいと言われ、足だけ見ながらまずは足を洗っている、というような状態です。会社の全体としての経営方針を知らずに、小さな部分的な仕事をしている平社員といってもいいでしょう。

いや、このたとえは正しくないですね。訂正します。

ニヒリズムとは、究極的には何の価値もないという価値観ですから、さっきのたとえは正確にはこうなります。

全体としてどんな形をしているかわからない動物がいます。この動物をすべて洗いなさいと言われ、足だけ見ながらまずは

足を洗っている。こういったほうが適切ですね。洗う作業はいつ終わるかわからない。賽の河原です。洗っている人には、この動物の大きさは五メートルなのか、五百メートルなのかもわからない。しかも、実は、この動物には大きさなんてないのです。アメーバのように伸縮して、大きさという概念を、本当は超越している。

会社の例でいうと、会社にいるのだか、どこにいるのだかわからないままに、小さな部分的な仕事をしている平社員。この部分的な仕事が究極的には何の役に立っているのかわからずに。さらに、自分は本当に社員なのかどうかもわからない。しかも、恐ろしいことに、その仕事には、本当は究極的な目的なんてないのです。

青山　そして、恐ろしいことに、現代社会にも本当の価値などないのに、それを承知で生きていかざるを得ないのが現代人だと。

前野　それを承知で、とおっしゃいましたね。本質的な価値などないのに、それを承知で生きていくというやり方と、それを知らずに、何か価値があると思い込んで生きていくやり方と、二つあると思うんです。前者が、私の言いたい立場。後者は、現代がポストモダンの時代だということを受け入れない人や、考えたこともない人の立場。

要するに、前者のほうがいいのではないでしょうか、ということを言いたいんです。

動物として「無」からポジティブな「価値」を選択する

青山　まだ、なぜ、ニヒリズムから、「ポジティブに滅亡を目指すべきだ」という価値が導けるのか、というお話を伺っていません。

前野　もうすこしです。
つまり、絶対的な価値はない。だったら、ポジティブに生き行くか、ネガティブに生きていくか、実はどっちでもいいんです。極論を言えば。より良い世界を作ってもいいし、世界を破壊しつくして自殺しても、どっちが正しいとは言えない。究極的には、ですよ。でも、どっちでもいいんだったら、あなたはどっちを選びますか？

青山　もちろん、より良い世界を目指すほうです。

前野　そう。そういうことなんです。根本的・普遍的にではなく、また、論理的・合理的にでもなく、直感的に、身体感覚として、私たちはネガティブよりもポジティブなほうがいいと思う。動物として、本能的に、というべきかもしれません。ただ動物よりも知的なのは、根本的、普遍的、論理的、合理的とは何かをわかったうえで、その限界をわかり、最後は身体にゆだねる、という行為を行える点です。プラトンからカントまでの長い時代も、人類にとって、無駄ではなかったということです。長い時代をかけて、人間的で知的なやり方が実は本質的には無駄だったとわかった。ありがたいことですよ。皮肉でなく。

大事なのは、絶対的・普遍的な価値と信じて選び取るのではなく、所詮は無だとわかったうえで選択する、ということです。合気道を考えてみてください。ほかの武道でもいいですが。勝とう、勝ちたい、と思うと体が硬くなる。合気道では、勝とうとは思わない。静かに精神を集中し、力を抜いて、相手の力をうまく利用すると、相手は倒れる。この感じです。ビジネスでいうと、金持ちになりたい、と目をギラギラ輝かせるのではなく、静かに精神を集中し、力を抜いて、やりたいと思うことをすーっとやる。すると人も集まってきて、うまくいく。

これらは、勝つ、儲ける、ということが第一の価値だと考えるか、考えないかの違いです。実は、考えないほうが総合的な意味で強いんだと思うんです。「強い」というのは単に勝つと

いうことではなく、総合的に「強い」。バランスがいい。

青山 なるほど。わかってきました。人類は、数が増え、GDPが増え、科学技術や経済が発展することこそが、目指すべき方向だ、と思っていましたが、それは正しくなかった。だから、人口もGDPも科学技術も、それ自体を目指して勝ち負けをとやかく言うのはやめようよ。むしろ、滅亡したってかまわないくらいに開き直る受動の構えのほうが、いい世界が作れるよ。こういうことですか?

前野 いい世界を作れる、というより、結果的にいい世界になるよ、というニュアンスですね。

二項対立を超越する

青山　私はポストモダンが好きなのでよくわかります。ただし、女性の私からあえて言わせていただきますが、前野さんの考え方は女性的ですよね。勝とう、儲けよう、進歩しよう、というような目的志向ではなく、相手の出方をうかがったり、静かに考えたり、身体・感性に委ねたり。静的、と言ってもいいかもしれません。

もっと経済成長を目指すべきだ、もっと科学技術を発展させるべきだ、日本の軍事力を増強して国を自分で守るべきだ、という強い――男性的な――主張をされる方々からは反論されそうな気がするのですが、これらの主張の対極にある考え方だといっていいですか？

前野　女性は男性を包み込む包容力のある存在で、男性は女性のてのひらの上で強がっているに過ぎない、という意味で女性的だとおっしゃっているのなら、そのとおりです。でも、そういう意味でおっしゃったのではないですよね。

つまり、女性対男性、攻撃対守り、のような二項対立図式でとらえられるのはちょっと違うと思います。包含関係です。

もっと儲けよう、もっと経済成長を目指そう、もっと科学技術を発展させよう、もっと軍事力を増強しよう、と考えてもいいのですが、所詮そうしたからといって世界全体が変わるわけではなく、立場上「局所最適」としてそれを目指しているんだ、とわかったうえでそう考えるべきだということなんです。局所最適とは、ある部分にとっては最適だけど、全体としては最適

ではないということです。日本の携帯電話がガラパゴス化といわれて、日本国内では売れるけれども世界では全く売れない。これが局所最適の例ですが、勝負をして誰かに勝とう、という目標設定は、相手の気持ちも考える包括的立場から見ると局所最適ですよね。敵と戦うのではなく、敵をも愛せよ、です。攻撃を超越している。それを女性的といえば「女性的」かもしれませんが、単なる優しさとしての「女性的」ではなく、包含する強さとしての「女性的」ですよね。攻撃的な方にはここをぜひ理解していただきたいのですが、おっしゃるとおり、なかなかご理解いただけません。攻撃的な方は、攻撃を超越していないですからね。

青山　成果が見えないから理解されない、という面もあります

よね。科学技術やＧＤＰや軍事力が増強されれば、国力の指標が明らかに上がる。これに対して、滅亡してもいいから相手の立場も考えましょう、では他に打ち勝てない。

前野 勝つことや成果を上げることが普遍的な価値だと思っておられる方には、確かにわかってもらいにくいでしょうね。

負けるが勝ちっていうじゃないですか。勝ち負けを包み込む一つ上の目線から見ると、勝ちも負けも価値がある。スポーツマンのかたは、負けても爽やかで「次に向けて頑張ります」とか「多くのことを得ました」と言いますよね。これですよ。負けて暴徒になるのは、レベルの低い観客です。

別の例を挙げると、武士は、切腹をした。切腹は決して単なる負けではなく、名誉なんです。

このように、もっと、勝ち負けにこだわらない時代になるべきだと思います。特に、これからの縮小していく時代。人口も、ＧＤＰも、縮小していきます。これは避けられない。もちろん、何か大きなブレークスルーがあれば別ですよ。バイオテクノロジーで簡単に食べ物が作れるようになる、とか。そうでなければ、人口は減る。ＧＤＰも当然減るから、これからは少なくとも、ＧＤＰではなく一人当たりＧＤＰを問題にすべきです。本当は、ＧＤＨですよ。ブータンの国王が言った、国民総幸福（ＧＮＨ）。現代流にいうと、国内総幸福（ＧＤＨ）。つまり、ＧＤＰよりも、国民の幸福を目指すべきですよ。

青山　いま、幸福を目指すべきだとおっしゃいましたよね。わかったつもりだったのが、またわからなくなりました。しつこ

くてすみませんが、幸福という目標を目指すことと、滅亡をポジティブにとらえることとはつながらないのではないですか。

人口減少時代の幸福とは？

前野　さっき、滅亡したってかまわないくらいに開き直るほうが、いい世界になる、という話がありましたよね。滅亡したってかまわない、というのを人間個人に置き換えると、死んだって構わない、死をも恐れない、ということになります。心から死を恐れなければ、勝とうが負けようが、儲けようが儲けまいが、なんだってこわくないじゃないですか。どんな不幸も、死よりもこわくはない。死を恐れないということは、何もこわくないということです。これが幸福でなくて、なんでしょう。心

の平静、至福の境地、悟りの境地です。つまり、絶対的な幸福とは、死や滅亡の恐怖を克服したところにあるものなのです。これが、滅亡や死をポジティブにとらえるということの意味です。どこか高いところにある幸福を目標として目指すのではなく、何も目指さないことの境地に至った結果、今ここに最高の幸福がある。

青山 なるほど。そのような境地に達することができれば、死はこわくないかもしれない。人類が滅亡に近づくときには、人類全体が「滅亡を恐れない」というメンタリティーを共有しなければならない、ということになります。そんなことって、可能なんでしょうか？ それに、「滅亡を恐れない」という言葉は、なんだか戦時中の一億総玉砕みたいな危険も感じます。

前野　滅亡を恐れない、ということの意味は、進歩、成長、発展、勝利が一番、というような価値観を超えるということです。増加と減少を表した【図①】を思い出してください。

それから、【図②】。前に、ソクラテス以前と、ポストモダンが似ているという話をしました。そこに挟まれた、プラトンからカントまでが、進歩、成長、発展、勝利が第一の時代。

【図①】と【図②】を重ね合わせてみると、合理的・近代的な進歩主義は、異常発生の時代と、かなりオーバーラップします。これは当然と言えば当然です。合理主義の上に築かれた近代科学技術によって、人の数もGDPも増えたわけですから。

しかし、近代の合理主義は、本質的な目的を間違えていた。異常増殖の時代だった。バブルといってもいい。人類バブルです。

人も増えすぎたし、経済システムも複雑になりすぎた。工業製品も進みすぎた。地球環境も破壊しすぎた。

だから、もうこういうトレンドはやめにしてはどうか。人も減り、進歩もほどほどにして、ソクラテス以前くらいの細々とした人類に戻したほうがいいのではないか。そういう帰結にならざるを得ないと思いませんか？ つまり、進歩主義・合理主義に偏りすぎた価値観を昔の素朴で感性的な価値観に戻すことが、滅亡時代の、とまでは言いませんが、人口減少時代の生き方だと思うんです。

青山 おっしゃることはわかります。つまり、これからは人口を減らし、ＧＤＰを減らし、昔の素朴な生活に戻るべきだという意見があることはわかります。しかし、現代人は、今の生活

を捨てたくはないはずです。エネルギー消費が多すぎるというのはわかっていても、今の便利な生活を捨てるのは難しいのではないかと思います。インターネットから医療・福祉まで、科学技術のおかげでよくなったこともたくさんあります。

現代人は「依存症」か？

前野　だいぶ前に、「現代人は現代的生活への依存症だ」という話をあとでしたいと言いました。その話をしましょう。要するに、現代人は単に依存症なんだと思うんですよ。いや、現代人に限らず、あらゆる人は依存症です。あるいは、中毒。一般にいう依存症には、酒、タバコ、携帯、ギャンブル、カルト、買い物、借金、薬物など、いろいろなものがあります。依存症

の定義は何でしょうか。世界保健機関の定義によると、「精神に作用する化学物質の摂取や、ある種の快感や高揚感を伴う特定の行為を繰り返し行った結果、それらの刺激を求める抑えがたい欲求が生じ、その刺激を追い求める行動が優位となり、その刺激がないと不快な精神的・身体的症状を生じる精神的・身体的・行動的状態のこと」です。

見てください。「都市生活」も「家電のある生活」も「収入の増加を求める性向」も「社会で成功したいと思う性向」も、みんな、依存症の定義に当てはまります。もっといえば、「普遍的・絶対的なものを求める性向」も、「進歩を求める性向」も。

現代人は、「都市に住み家電を持ち収入を増やして社会で成功するという進歩の快感や高揚感を知った結果、それらの刺激を求める抑えがたい欲求が生じ、その刺激を追い求める行動が

優位となり、その刺激がないと不快な精神的・身体的症状を生じ」ます。全員とは言いませんけどね。

禁煙でタバコを断つのと同じく、収入も名誉もない原始生活を強制したら、多くの人はどうなるでしょうか。しばらくは耐えられるかもしれませんが、早く元の文明生活に戻りたいと思うのではないでしょうか。依存症の離脱症状と同じです。離脱症状を回避するために、さらに依存の度合いを深める。現代人も、よりいっそう、収入や名誉を求めるようになりそうです。

しかも、依存症の症状には否認があります。青山さん、あなたは、自分が「現代社会依存症」という病気であることを認めますか？

青山　現代社会に住み続けたいとは思いますが、それが病気と

いうのは抵抗があります。そんなことを言ったら、ほとんどの人が病気ということになってしまいますよね。

前野 病気だと認めないんですね。それが依存症のもっとも典型的な否認です。自分の依存はまだ大したことはない。それから、ほかの人もやっている、というのも依存症の否認の一つです。ほかには、害が少ないから大丈夫。人に迷惑をかけていないから大丈夫。そうしていると落ち着くのでしょうがない。法律に違反しているわけではない。世の中のせいだ、などなど。

青山 依存症と現代的生活（ないしは近代的思想）がアナロジカル（相似的）であるというお考えはわかりました。でも、やはり、依存症は病気であり、人に迷惑をかけます。一方、現代的生活

そのものが病気だなんて、どこの医者も言っていないし、そうしたからって、誰かに迷惑をかけているわけではありません。さらに、先ほども言いましたが、大多数の人がそうなのだから、病気とは言いませんよね。

健康か病気か⁉　正常か異常か⁉

前野　まず、病気は社会が決めている面がありますよね。病気と健康の境界は人為的です。ニコチン依存症の治療は保険適用になりましたが、昔はそうではありませんでした。つまり、病気かどうかの境界は、社会が決めるものです。「現代社会生活はそれ自体が病気だ」というのは、たぶんまだ私しか言っていないことなので、今は受け入れられないでしょうが、将来その

考えが多数派になる日が来ないとは言い切れません。いや、今でも、キャンペーンを張れば、世界中で何千万人もの人が賛同してくれると思いますよ。

それから、現代社会生活が誰かに迷惑をかけているかどうか。少なくとも、地球に迷惑をかけていますよね。地球環境を破壊した。温暖化の問題もありますが、その前に、地表を都市と農地に変えてしまっていて、自然のままの部分は非常に少ない。生物多様性も、大幅に失われている。

狩猟・採取生活か農耕生活をしていた昔の人が現代に来た場合を想像してみてください。彼らは現代文明をどう思うと思いますか。ビルや機械に覆われた世界を見て、異常な世界だと思うのではないでしょうか？　人類史全体から見たら、現代は異常な世界です。私たちは生まれたときからその世界にいるから、

それを普通と思っていますが、これはもはや生まれながらの集団依存症ではないでしょうか。

うつ病も高血圧もガンも現代病と呼ばれます。現代という異常な世界に住むことのストレスが少なからず影響しています。その原因が、「現代生活依存症」だと考えると、もはや人に迷惑をかけていないなんて言っていられません。

現代人は、現代生活依存症、あるいは、現代生活中毒なんです。

青山　危機感はわかります。でも、前野さんも現代的な生活をしていて、長生きしたいともおっしゃっている。だから、有言不実行ではないのですか？

前野　厳しいご指摘ですね。私自身は、私も含めた現代人が現代生活依存症であることを自覚し、なるべくそこから回復する努力をしているつもりです。この対談だってそうです。啓発活動の一環です。もちろん、残念ながら人類の依存症は完治するどころか重症化しつつある。だからこそ、それを自覚しながら生きることが完治への一歩だと思っています。

ソクラテス以前とポストモダン、といいましたが、ソクラテスの「無知の知」、ブッダの「空」、荘子の「万物斉同」、前期ウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」、デリダの「脱構築」、リオタールの「大きな物語から小さな物語へ」という思想に学ぶことも、いわば依存症治療の一環といってもいいでしょう。ブッダを例に挙げますと、金銭欲や名誉欲を超越し、欲にまみれない生き方を推奨しています。キリストだって、金持ちが天国に

行くことは、ラクダを針の穴に通すよりも難しいと言っていますよね。彼らに学んで、競争主義、発展主義、合理主義を超越することが重要だと思います（※1）。

（※1）補足説明…ソクラテスの「無知の知」は、私たちが「知識や知恵を持っている」と思い込んでいることを戒める。荘子の「万物斉同」は、すべてのものは一つである、という。つまり、内と外、自と他、進歩と衰退、といった二項対立図式を戒める。ウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」では、すべての哲学的問題は言語から生じる擬似問題にすぎないと戒める。デリダの「脱構築」は、近代までに構築された様々な価値が実は本質的には無価値であることを戒める。リオタールの「大きな物語から小さな物語へ」は、近代が目指した、普遍的で皆が従いうる大きな物語は幻想だったので、現代の人は各自の小さな物語を生きるしかないという。いずれも、プラトンからカントまでの進歩主義、普遍主義、科学技術バブル、強欲のバブル、環境破壊、人間の異常発生（［図①］および［図②］）を戒めるという意味で共通している

私自身も、ささやかながら、環境にやさしく、なるべく欲を超越した生き方にシフトしたいと思いながら過ごしています。あまっちょろいといわれるかもしれませんが、キャンプが趣味でして、自然生活を志向しています。大学での仕事や子供の教育があるので、なかなか田舎に移住することもできないのですが、いつかはそうしたいですね。うーん。しかし、正直言って不十分です。有言不実行といわれると、頭が痛いですね。これからはもっと頑張ります。

ただ、開き直って一言述べますと、このような矛盾が生じる原因は現代の構造にあります。近代を否定するということは、『「普遍を否定する」という「普遍的価値」的なもの』を提示することにならざるを得ない。自己矛盾に陥るのです。この問題

は「論理」の限界を超えないと解決できないと私は考えます。この話は長くなるのでまた別の機会にしましょう。

ナチュラルな時代へ

青山　現代人は少しずつでも原始的生活にシフトすべきだというお考えはわかりました。では、科学技術はこれからどうすればいいんですか？　人類が発展させてきたと信じている科学技術も捨て去るべきだとおっしゃるのでしょうか？　それから、仕事。前野さんは仕事があるから理想的原始生活には移りにくいとおっしゃいました。ほとんどの現代人にとってもそこが問題で、多くの人は現代的なさまざまな仕事をしています。そこから見直さないと、原始的な生活はできないですよね。

前野 それもおっしゃるとおりです。普遍主義的な物言いで、原始的生活こそが善だ、と主張するつもりはないですが、前に述べた論法――普遍主義が不可能だとしても、ポジティブかネガティブかの選択が可能なので、それならポジティブを選択すべきという論法――からいくと、これからの科学技術は、「環境共生、安心・安全、健康・福祉」に資するものを中心に発展すべきだと思っています。「利益追求、刺激追求、勝利追求」ではなくて。

つまり、自己の欲求よりも公共のためになることに知恵を使うべきだと。これを続けていくと、金儲け至上主義や科学技術至上主義を徐々に脱して、ゆっくりとでしょうが、ナチュラルな生活へと移行することが可能になると思うんです。

青山　共同体主義ですね。

前野　そうきますか。何度も述べたとおり、二項対立の一方を支持する気はないんですよ。個人主義か共同体主義かという二項対立の選択としての共同体主義ではなく、むしろ、幻想主義というか、ポジティブなニヒリズムというか、何主義でもない。何主義でもないところから選択した結果が、共同体主義に似ている面もある、といいましょうか。

青山　『これからの正義の話をしよう』のサンデル教授は、カント流の理想主義も功利主義のような帰結主義も両極端だからバランスを取るべきだという文脈から、結果として共同体主義

を選択しているように思います。前野さんも同じでは？

前野 うーん。散々話してきた結果、今はやりのサンデル教授と同じだ、と言われるのはなんだか悔しいですね。まあ、でも、現代の問題を総合的・客観的に考えると、当然の帰結としてそこに至らざるを得ないということは言えると思います。

しかし、サンデル教授よりも覚悟ができている、と言っておきましょうか。滅亡も死も恐れない。ゼロからの再構築という強み。

つまり、一般論として、西洋哲学では客観性を重視する。だから、「私」はそこにいない。これに対し、東洋流では自他非分離。だから、生きるための哲学なんです。覚悟という言葉が出て来る。ここは根本的に違う点だと思います。

青山　そうですね。まだまだ話は尽きませんが、お話が一巡しましたので、今回はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

前野　こちらこそ、ありがとうございました。次回はぜひ青山さんのお考えをもう少し詳しく聞かせてください。

インタビューを終えて

私がアメリカの高校に通っていた頃、ルネッサンス・マン（Renaissance Man）という言葉をよく聞きました。ルネッサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチのように、芸術から科学まで、

分野を超えて人類の知を切り開く人々のことを指します。現代は、学問も仕事も細分化されていて、ルネッサンス・マンは現れにくい。必要であるにもかかわらず。前野さんは、こんな時代にありながら、ルネッサンス・マンを目指されている人の一人なのだと思います。

ふつうはネガティブなイメージのある死や滅亡のことを、明るく楽観的に、そして朗らかかつポジティブに話される姿も独特でした。学者というよりも、思想家、宗教家のような雰囲気と世界観をお持ちです。死や滅亡を徹底的に覚悟することによって生きる強さが生まれる。このメッセージを全人類に向けて送りたい。そんな情熱が実を結ぶことを応援したいと思います。（青山由佳）

前野隆司…１９６年山口生まれ。慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授／青山由佳…１９７７年東京生まれ。外資系企業勤務の後、フリージャーナリスト

（滅亡に向かう世界／おわり）